物論

五

二〇八

藤井蔵書

参遠州屋 島井町 治助

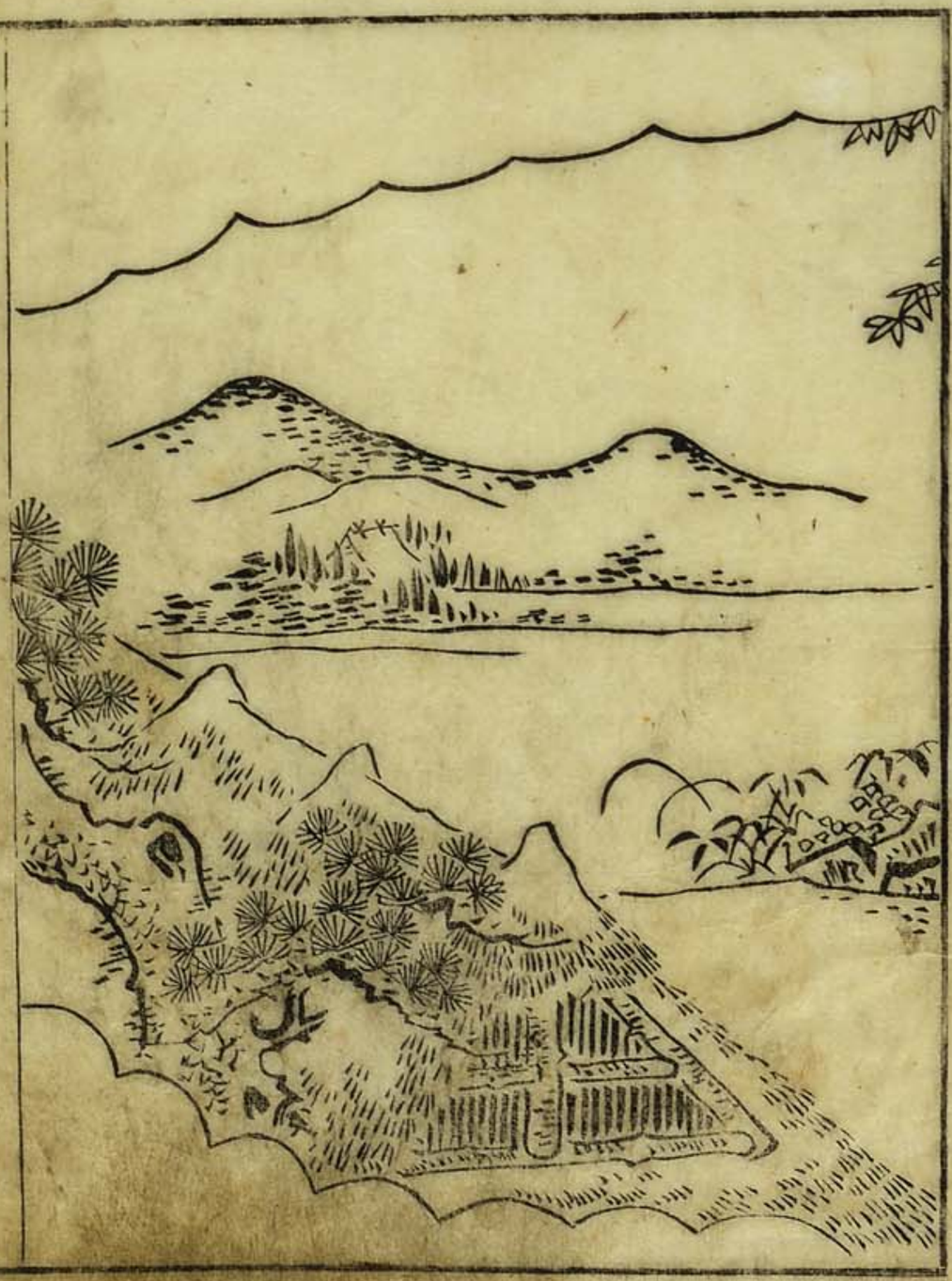
怪物無論卷五

岩倉少女逼淫怨魂鬼話

ゆゞしの法華堂の内。出路岩倉の山をふ
ぜ沈沈何事くつるのあり。恋ハ樹の間の
の武士さらしゞ子佩あり。て燎刀の刃と成
変て隠遁して樵夫懸の住ぬとなせり。一
人の宗女小揺なるの。天性の美色秀乃
異ゆて。且宗家乃乃て精く聰明怜
悧なりれば。祝くるの情と知し。ぜく者

恋ひと寄ざるハなくなり。彼ハ世小揺も
亦淫色の情深く。暮く近隣乃美
男壮士て公と通いせ。彼しなく呈なく。
思ひ彼乃抜の為ハ乃乃毎ハ
勢る沒のくき彼ふひ〳〵して。呈そその
男しもの事論と引せ〳〵ぬ父母兄と歎
息し。或ひい公ハ。あるひい義論し。連ふ
高解さ〳〵くぶも敢て容ぜ。只淫淫て
さて一公狂丸のごく。ぞるくさと近て逢

あり。きて、七男子ふみつび急ぬ。去ほどに小揺いのしれく四月三月絶し。精神男身極して忽ち病乃床に沉て沈沈不可既軀疲弱し。医療効なくして孫子室家なり。はれば父母の無傷にたゞなく。その業因乃深甚なると思ふ。葬送葬をいとなみて。行倒倶数多ふ布施と引て怨て仏事を修し。指乃倶古中て送殯と祀て是その彼岸と走て出て



のこ孤ひとりるゞ子后妃異乃ることあれ
小樣ゞ亡霊治中を俳徊して諸人小学宮
をなまふ玉るし。雖つゝれく世峯小流市
して其虚後匿々なるを。彩て其此見房東
乃雑書了。大鈸宗女ことゝのあゝ天性
美男乃答るく。悠倩小して点和漢乃
文小達し。且淫乱を好こ書ゝし乃数ゞ。
此狂不ゝ思の病小犯生。渾死衛小疲
消しゝ乃べ宅春。疲死医巫を灸治をも

ふ勅あるべし。ふるまはれ家女兵衛毎夜人を
をざけ。ゐて病架を居らしめ。指者
紙と墨もゆ。紙べ。家内挙て見と寄を。
ある夜深更て追び家女が父淳正
なるもの瞳ふ病架を何ひたるふ背れ
給そうる娘髪乃女。必良と差てさも
疲指るまを伸し。家女が肩ふち撫
て即死ぬ。淳正大ふ怪怖し。こは何
なる妖ぞや。是全く精邪遺後の附ふ

係て。彩まの為ふ拒さるものなるん。元
人の即てを歌女人となるものへ医書て
いへる雑魂病なり。それふへ異なるらんだ。
まべて人乃所て邪を受ぎ。即附へその
鬼行ふ海し。邪静ふして共眠るを
なるを。今行ふ彩ふ附て竟帰るふを沼
ざる附へ。ふる霊となる人。去っても
雑治の症ふ何まべきて。去ふ宮医
と雪て泥まるふ切あるぎ。そ沈ぬ彩奇

疾と称するものの業なるゆえあるべし。病者義中ゆ異の如し。交媾の因と結んで体骨を起すなり。ゆえに世俗ゆ疫鬼病おこすと称して祭る。邪ゆ仏ゆ借きしゆ病と称人。

あるべきもの武人曰この等疾たゆあるべきもの。

因ゆえ人の業の病ゆして邪人の疾鬼病者自死のゆ邪ゆあるゆ。只病者を逆ゆるゆ。行乃疫よう

生ずる瓶しるふ信てなり、今濃州の瓶
のごとい能、衆人の用ふ遍ぐ。猶て一人、
女形ぐ。是新意ぐ飛ぜ金く池沈何
ものが姫小猫が執念のなを所なり恨未
性貪深然を好ぐ遂ふ及て命と矣
ひ。昔く世界乃美男牡士ふ性恨ぐ。
い
遂感の情を弥生ぐ人ぐ。己念止ぐさて
こて此邪淫を人ふ受さ。男女乃情
を彫理せんぐ生ぐ己ぐ偽執の

海に入りて。斯る害をなすもの多し。
我結人の為に。山邪宗を斷ず〳〵。
自後百人數多人を率てのかざり
と葬りたる化物。車輿乃面
に。三字と書めたる

蘘荷

群談採余に世文字及び中思邪
気疫鬼ホを防ぐ也。如氏紀て墓の前に建おく。鬼人と
偶ふ傳ふ藏ぬて稱ぶると何の所に。
平氏五文の沙。ふ名とゝなせし異歌
乃女。死未門てはそしはとゝなるよりも怨
嗟ふ嗟。逢を耶といふし。
て。こゝ内者の所為なるや。見れ墓の中ふ人
とゝなるふ。形る乘輿輿と建て。こゝ
泪む妻捨さるし。大ふ罵ゝ受月崗
怨して。彼ゝ方ゝ行ゝ。家へ大地
ふ倒ま伏て。泛味ぶ多數そし物怪し。
財ふ石思彼や那里ともなく。威風秀
羅する壯士。各甲冑ふ兜と固め。鎧と
携へ大勢一陣ふ蘇来て。その女を囲こ。

愛詳と愛しそのふ。我く汝が邪淫のあるを
今や一命と矣ひとをる孫ふ玉ひ。この世
命豈清法ふ徴しそ忘ぐそく。抜そそ玉ひ
と抜ざるなりと。強く鞭を挙て投擲を。
女ハ涸卵し驍哭して。ある苦しや抜ぐそや。
殺さもあ人と前過を悔そ。連ふ懺謝し
鞭死滝るとつ玉。程を容ぜ。男ひの仇
ふ呵責して蹴まる本平ほ玉ひ。今て者
ふ為るぞ〜〜。らの牡士者候然〜〜して

彩密潛失られぬ。世も所為なく呉服屋
の親方の亜三郎。揚屋へ来ル
頃その拝人くの孔ル亜三郎。揚屋へ来ル
相引晴の為に出張る。名古屋
藩を立出。国境に加賀の青柳を同盟さ
るゝ。ナニ今来る曽有なる。終合ず
連て帰来るべ。自後しその流行の
青疫と結ぶる者。峯狩ル異絶し快
気せり。後て或人道人に問て曰。爲ル小
揺溢色ル溺れて。死後枕著の金富

字を逐ひ。夢く世の美男とまことひて。
見が為ふ害となることを。霊の所業。その乃
遠域を著さるのごとう。怪事を
なをさてたも有べけれど。今甲冑乃壮士
なるものが振を撃て被体の情となせし
こをろは。持ふ見何人の怨恨なるか。ながく
邪祟ふ祀され。苦からるこ病者かくべ
しくるも。皆いまごこ二命を害ひる者と
算ぎ。能くべきを念ふの外ふ敢とあら
へをば所謂なり。因て其原を解し
務へ。乃人ふ見腎神なるこ病者おかみ
ふ振が強盛ふ祟されて。既ふ腎をの裏
くせしめ。病者の腎神ふ敢を取
こ歌をおくるりのなり。凡て人乃腎
を骨絶する時へ。神舎を守る事能
はざ。ふ敢とあらはをなりこ。養志及
医薬無効なり。祥なりこふ。因ふ器物
ぞく情も垂こ。色脈乃一致ふして

頻人嘉頻如乃鄙情をひき出し。人乃天
年を愆こゝを顧ざるへ着さる乃そゝ
沙甚なるを仰てやう。勉て
俗傑さる事なかれ

怪物雲論巻之五終

怪物雲論巻五

享和三亥年春三月發行

京寺町通松原下ル町
彫村治兵衛門
大阪心斎橋筋久宝寺町
彫尾屋八兵衛
江戸四日市
松本平助
同所
石渡佐助
同堺江町四丁目
夢田屋利兵衛

書林